

メッセージアウトライン

ルカの福音書 2 : 1 ~ 20 「救い主誕生の良き知らせ」

[1-3] 「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った」

イエス・キリスト誕生の歴史的背景

①ローマ皇帝アウグストゥスによる住民登録の勅令(1)

「アウグストゥス」BC 31~AD 14 年在位 その生涯は BC 63~AD 14 年で 77 歳没 アウグストゥスは当時の世界の征服者となったユリウス・カエサル（シーザー）の兄弟の孫にあたる。彼が初めて公にローマ皇帝に「カイザル」という称号を用いるようになった。この勅令はローマ帝国の各地の人口を調べて税金をかけたり、徴兵をするためのものであった。

②キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録(2)

住民登録はそれぞれ先祖の出身の町で行われた。

キリニウスの最初の任期 BC 7~BC 2 年、2 回目の任期 AD 6~AD 9 年

③ヘロデ王(その実績の大きさからヘロデ大王と呼ばれた)の治世にキリストはお生まれになった。→マタイ 2 章 ヘロデ大王の没年は BC 4 年

これらを基に計算していくと BC 4 ~ 5 年がイエス・キリストの誕生の時となる。

西暦ではイエスの誕生をもとに BC (Before Christ キリスト以前)と AD (Anno Domini 主の年[ラテン語])と紀元が分かれるが、実際はそれより 4~5 年前がイエス誕生の時であったことがわかる。

ローマ帝国が当時の世界を支配し、安全が保たれ、「すべての道がローマに続く」と言われ、交通網が整備され、キリストの福音が広まりやすい環境が整った時代に、神はご自分の計画を実行に移されたのである。

[4-7] 「ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで、飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである」

この箇所を読むと、人口調査のため、どの宿も満員で、それでもようやく彼らが泊まることのできた家畜小屋で男の子が生まれたという以外、特に変わったことはないように思える。

しかし、そこに非常に特別なことがあった。それはヨセフとマリアはまだ夫婦としての関係を持っておらず、マリアの胎に宿っていた子は聖霊によるものだということである。マリアはルカ 1：26 節以下で御使いガブリエルが彼女に現れて、彼女が聖霊によって身ごもり、生まれる男の子をイエスと名づけるようにと教えていた。夫のヨセフもマタイ 1：18 節以下で、夢の中に御使いが現れて、マリアの胎に宿っているものは聖霊によるということ、彼女は男の子を産む。その名をイエスとつけること。この方がご自分の民をその罪からお救いになると告げていた。

マリアとヨセフは信仰によって御使いの語ったことを受け入れ、ヨセフはマリアをそのまま妻として迎え入れたのであった。このヨセフはあの有名なダビデ王の子孫であったが、今はガリラヤのナザレという田舎町で大工をしている身であり、マリアも同じナザレの町のごく普通の女性であった。

もし彼らが御使いの告げたことばに従わなかったならば、神は別の男女を見つけなければならならなかっただろう。しかし、彼らは将来受けるであろう非難や中傷を予想しつつもあえて信仰をもって神のことばに従ったのであり、このことによって神の救いのご計画は実現していくこととなる。そして、今、ヨセフは身重となっているマリアを連れて住民登録のために先祖ダビデの町ベツレヘムに来ている。もしこの住民登録がなかったなら彼らはそのままガリラヤのナザレにおり、そこで子が生まれたら、救い主についての預言は成就しないことになる。ゆえに、この住民登録のための移動も神のご計画のうちにあったのである。

ここにおいて旧約の預言が成就している。

- ①人類の始祖アダムが罪を犯した直後の原福音の成就 ……創世記 3:15
- ②ダビデの子孫として生まれる……Ⅱサムエル 7:12~13,16
- ③ユダヤのベツレヘムで生まれる……ミカ 5:2
- ④処女より生まれる……イザヤ 7:14→マタイ 1:20~23
- ⑤やみの中を歩んでいた民は大きな光を見た…イザヤ 9:2→マタイ 4:12~17,ルカ 1:79

[8-20]「さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。御使いは彼らに言った。『恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つめます。それが、あなたがたのためのしるしです。』すると、突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。『いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で平和が、みこころにかなう人々にあるように。』御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。『さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。』そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを探し当てた。それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」

イスラエル民族はもともと先祖アブラハム以来、羊や他の家畜を飼うことを生業としていたが、彼らがカナンに定着すると羊を飼うことだけではなく、農業や商業も盛んになっていった。そして羊飼いで裕福な者は町で生活し、羊たちの実際の世話はそのしもべや雇用人たちが従事するものとなっていた。そのような彼らがこの夜も寒空の下で寒さに耐えながら、野宿をし、羊の群れの番をしていた。すると突然、主の栄光が周りを照らし、昼のような明るさとなり、主の使い（天使）が彼らのところに現れ、救い主誕生の喜びの知らせ、良き知らせを告げたのである。そしておびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美する光景を見た。

「いと高き所で、栄光が神にあるように」(14)はラテン語訳「グロリヤ・イン・エクスセルシス・デオ」で知られ、日本では讚美歌 106 番に収録されている。また「平和」とは地上的、政治的な平和とは異なる靈的性格のものを指す。

この世の身分の高い人々や裕福な人々、肩で風を切って歩いているような勢いのある人々などではなく、当時の羊飼いのような社会的にごく普通の人々に一番最初に救い主誕生のすばらしい喜びの知らせが告げられた。これが神のみこころであった。

彼らは救い主誕生という喜びの知らせを聞いて、夜中であるのに捜しに行った。これは非常識なことであろうか。しかし、彼らはそこでとどまっていることができず、行動に移したのである。喜びの知らせは時に、人にこのような行動を起こさせるのである。そして、ついにマリアとヨセフと飼葉桶に寝ておられるみどりごを捜し当てた。彼らはそこで御使いから告げられたことをマリアやヨセフに知らせた。それを聞いた人たちはみな驚いたが、マリアはこのことをすべて心に納め、思いを巡らしていた。彼女は今までの様々な出来事に、確かに神が働いておられることの確信を深めていったのであろう。

羊飼いたちは単に聞くだけで終わらせるようなことはしなかった。後にヘロデ王や王に仕える学者や祭司もこの救い主誕生の知らせを聞くことになるが、学者たちは行かず、ヘロデに至ってはこの救い主を殺そうと計った。→マタイ 2 章

彼らは自分の身の安全や地位の安泰を思い、礼拝しに来るどころか、無視し、殺そうとまで考えたのである。これが神に逆らうこの世のやり方である。

私たち人間は神によって造られ(創世記 1 章)、生かされているのに、その神との契約を破り、神の前に罪ある者、けがれた者、死すべき者となり(創世記 3 章)、自己中心となり、神から遠く離れ、罪の暗闇の中に空しく生きる者となってしまった。しかし神はそんな私たちを見捨てられず、私たちを愛し、神の子とし、永遠のいのちを与え、天の御国へ入れてくださるために救い主として御子イエスを送ってくださった。神の救いは、ただ一方的な神の恵みとあわれみによって与えられるのである。そして、このイエスはユダヤ人だけでなく、全世界の救い主である。彼は神の御子であられるのに人としてこの世に来られ、私たちの罪の贖いのために十字架への道を進まれるのである。→ヨハネ 3 : 16

神が人となってこの世に来てくださった。それは私たちを救うためであった。まさにこれこそ良き知らせ。すばらしい喜びの知らせである。

人生において苦しんでいる人、悲しんでいる人、悩みの中にある人、重荷を負っている人、どのような状態の人でも救い主としてこの世に来られたイエスを自分の救い主として信じる者は救われ、神のものとされ、平安が与えられ、豊かな人生を送ることができるのである。

私たちもこのすばらしい救い主イエスを送ってくださった主なる神を羊飼いたちとともに喜び賛美し、感謝しよう。→マタイ 11 : 28、I コリント 1 : 26~29